

アジアン・フォーラム「琉球からの声を聴く： 下地イサムさんとぬかあ～ぬか語り合う」ウェビナー

藤田ラウンド 幸世

1. 予期せぬ ICU キャンパスのロックダウン

2020年の春学期は、国際基督教大学（以下、ICUと略す）でも新型コロナウイルスの影響で全ての授業がオンライン授業に切り替わり、キャンパスは4月初旬にロックダウンとなった。

2019年度秋学期の日本国際基督教大学財団（以下、JICUFと略す）による教員向けのプログラム助成金¹⁾を受けて、筆者は2020年の春学期に担当するMCC104「言語と社会」のシラバスを「琉球からの声を聴く」というテーマで組み、教室からICUキャンパスに拡げたプロジェクトと重ねた授業を展開する予定であった。1) 国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館（以下、ICU湯浅記念館と略す）での写真展「よみがえる宮古島の祭祀：写真家、上井幸子と比嘉康雄の写した記憶」、2) 国際基督教大学礼拝堂でのコンサート「琉球からの声を紡ぐ：沖縄島、石垣島、宮古島のそれぞれの島ことばと音楽」、3) クリスチャン・ウィーク企画の「琉球からの声を聴く：みゃーくびとうの歌手、與那城美和さんと下地イサムさんとぬかあ～ぬかと語り合おう」、4) ダイアローグハウス国際会議室での学生のポスター発表とコロキウム「琉球からの声を聴く：沖縄県出身の専門家と『言語と社会』の学生たちとの、『声』の掛け合い」を計画していた。

2. 「琉球からの声を聴く」プロジェクト

「琉球からの声を聴く」プロジェクトの発端は、筆者が2012年から始めた沖縄県宮古島市でのフィールドワーク調査である。宮古語（以下、宮古語で「みゃーくふつ」と表記）と宮古島を通して、琉球に眼を向けることができた研究者としての筆者がこうした視点を大学の教育実践を通して還元し、活かしたいと考えた。学生全員を宮古島のフィールドワークに連れ出せないのであれば、宮古島や琉球の島々からICUのキャンパスで写真展を企画したり、ゲストをお招きして学生たちと様々な形で交流をすることができないかという発想に至った。2019年1月から企画を練り、同年11月にJICUFからの助成が決まった段階で、先述したそれぞれの企画の準備を始めた。

「琉球からの声を聴く」プロジェクトを貫くのは「聴く」という行為である。ICU湯浅記念館特別展の上井幸子と比嘉康雄、二人の写真家が捉えた1970年代の宮古島の写真には、まだ開発がされていない豊かな森と海があり、集落ごとの日常生活や年中行事が見てとれ

る。こうした祭祀の「写真」と対峙することで、宮古島の人々の「祈る」声、神女たちが謳う神謡の響き、樹木を揺らす風の音、穏やかに打ち寄せる波の音に耳を澄ませる。また、礼拝堂で予定していたコンサートでは、ICUの教員であるマツ・ギラン先生をはじめ、ギラン先生に三線の手ほどきを受けた現在のICUの学生と卒業生、また、宮古島出身のプロの歌手の方々を招き、沖縄島、石垣島、宮古島の民謡、古謡を歌っていただき、それぞれの島の「メロディー」と「ことば」を味わう体験となる予定だった。小さい音であっても耳を澄ませて真摯に聴く、「経験」を通して考えることで、聴いたことを自分ごととして受け止めるための練習でもある。

「言語と社会」の授業では、社会言語学のアプローチで消滅危機言語について講義をする。「琉球諸語」がなぜ消滅危機言語となったのか、もともとは琉球独自の文化と国を持っていた琉球弧の島々が特に明治時代にどのように日本に編入され、近代化とともにどのように変容したのか。高校の教科書では「廃藩置県」と習うが、それは「琉球処分」を指すことでもあり、1972年に戦後アメリカの統治下にあった沖縄県が日本に戻った「年」は、当時の「日本」から見れば「沖縄返還」であるが沖縄から見れば「本土復帰」である。同じ事象でも、どこから、どう観るのかによっても違って見える。これは現在、多様なメディアが日常生活にある状況の中で、一人一人に必要となるメディアリテラシーにもつながるだろう。このプロジェクトは2020年の春学期だけではあるがICU湯浅記念館、図書館、礼拝堂、国際会議室とICUキャンパスをフルに使用し、教室外の学びとリンクさせることも意図していた。琉球に対しては、教員が解釈をした知識を限られた空間である教室内で伝達するだけではない授業を展開したかったのである。

しかし、2020年春学期の写真展、コンサート、クリスチャン・ウィーク、コロキウムは全て中止せざるを得ない結果となった。

3. オンラインでの発信、アジアン・フォーラムのウェビナーとしての実施

2020年春学期の先述した「琉球からの声を聴く」各プロジェクトは、結果として、1番目の湯浅記念館での写真展は、YouTubeのギャラリーツアーの3部作品、公開講座はウェビナー（ウェブ・セミナー）となり、2020年6月13日より湯浅記念館のウェブサイト上で一般公開がされている (https://subsites.icu.ac.jp/yuasa_museum/special_exhibitions.html#special_exhibits_spri)。

2番目と3番目のプロジェクト、宮古島出身の歌手の下地イサムさんと與那城美和さんを迎えての一般公開のコンサートとクリスチャン・ウィークでの「学生と宮古島からのゲスト」とトークは、2020年6月9日にアジア文化研究所が主催するウェビナー、第185回アジアン・フォーラム「琉球からの声を聴く：下地イサムとぬかあ～ぬか語り合う」として、オンラインで一般公開の同時配信という形となった。本稿では、このアジアン・フォーラムのウェビナーについて報告する。

オンラインのメリットの一つは、地域や「場」に限定されないことである。今回のアジアン・フォーラム「琉球からの声を聴く」ウェビナーは、沖縄島からの下地イサムさん（以下、本稿では姓ではなくファーストネームを使わせていただく）をメインゲストとしながら、トークの最後に、宮古島から出演予定であったもう一人の歌手、與那城美和さん、また、今回、交渉したものの出演がかなわないことになっていたフォーク歌手のひなひろしさん²⁾に、映像なしではあったが「声」で出演していただいた。

今回のウェビナーは、筆者の授業に合わせてプロジェクトを展開していたため、MCC104「言語と社会」の授業時間に合わせて設定し、履修者のうち、105人が参加した。授業の履修をしている学生達は、このウェビナーでイサムさんの話を聴いた内容を踏まえて、後述する課題を行うことになっていた。加えて、アジア文化研究所主催のアジアン・フォーラムとなったことで、一般も含む学内外に向けた公開ウェビナーとすることが可能となった。事前の登録者数は授業の履修者105人の学生を含め203人、当日の参加者は185人であった。

参加者は、通常の授業ともイサムさんのコンサートとも異なる顔ぶれであった。まず、地域であるが、オンライン授業の履修者105人だけに限っても、日本国内の1都2府15県、アメリカ合衆国のカルフォルニア州、ハワイ州から視聴しており、一般参加の方々の中にはイギリスや宮古島をはじめ、沖縄島からの登録も予想以上にあった。筆者とイサムさんの事務所からそれぞれSNSで告知をしたこともあり、一般参加者はイサムさんのファンの方々、宮古島のイサムさんの友人、後輩、沖縄県内の研究者、琉球諸語に関わる国内の研究者、筆者の友人である研究者仲間など、本来であれば重なることがなかなかない属性の人たちがウェビナーで集ったことになる。

事前登録の際には、登録フォームにイサムさんへのリクエスト1曲を尋ねる項目を加えた。その理由は、ウェビナーはチャット機能で当日に質問は可能であるが、参加者は顔を出すことができないので、リクエストをするという行為を通してイサムさんとのコミュニケーションが図れたらと考えたためである。その結果、合計35曲にわたるリクエスト曲が上がり、多い順に「おばあ」、「もうひとつのうりずんの島」、「開拓者」の3曲を、また、オープニングの自己紹介として、イサムさんのデビュー曲である「我達が生まれ島」を準備していただいた。最後のアンコールである5曲目はご自身が選び、ウェビナーでは以下の5曲を聴かせてもらうこととなった。

- 1) 我達が生まれ島（ばんたがんまりずま）
- 2) おばあ
- 3) 開拓者
- 4) もうひとつのうりずんの島*
- 5) 百夜（ももよ）**

* のひなひろし作詞・作曲

今回のウェビナーは、題名の通り、「ぬかあ～ぬか（ゆっくり、のんびり）」と話すことが目的とはいえ、全体の流れとタイムラインは筆者が計画し、あらかじめイサムさんに心の準備をしていただくためにトークの構造となるテーマを子どもの頃の思い出、特に「はーりー（海神祭）」を中心に集落での年中行事について伺いたい旨を伝えてあった。別の見方をすれば、このトークはインタビューであったとも言い換えられる。筆者は大学で卒業論文を書くためのゼミ、2020年度は20名のゼミ生を抱えていたので、ウェビナーのトークはゼミ生たちに実際の「インタビューの方法」として、どのように構造とその流れを作るのかという具体的な場面をフィールドワーカーとして見せる機会でもあった。インタビュー形式で尋ねながら、イサムさんに子ども時代の、まだ宮古島の中でも家族の中でみゃーくふつが飛び交っていた背景をどのように具体的に語ってもらうのか、インタビューを行う研究者としての実践でもある。このように、多面的な要素が含まれる「トーク」であったわけだが、ラジオのパーソナリティの仕事も長年行っているイサムさんは懐が深く、こちらの質問に合わせて難なく応えて下さった。

ウェビナーの最後には、サプライズゲストとして美和さんとひろしさんに登場していただき、美和さんには事前に打ち合わせを行っていた通り、イサムさんとみゃーくふつで実際に会話をさせていただいた。この仕掛けは「言語と社会」の履修者に向けたもので、授業で学生に伝えたみゃーくふつのバリエーション（言語変異）、同じ言語とはいえ、さらに地域により発音の異なりがあるという実際を、美和さん（平良）とイサムさん（久松）のみゃーくふつの会話に耳を傾けて確認してほしかったためである。宮古島出身の美和さんやイサムさんの世代は子どもの頃に、自宅がある集落ごとの地域のことばを話したり聴いていたりしていた世代である。つまり、自分の地域を離れると同じみゃーくふつであっても、発音が微妙に異なることが明白になり、それが逆に集落特有のより強い結束力となっていたと考えられ、発音が地域に強く結びついている。イサムさんが美和さんと話す中で二人のみゃーくふつの母語話者（いわゆるネイティブ・スピーカー）の音を聴く機会も作りたかった。学生にとっては、これは貴重な機会であり、聴衆の中にいた宮古島以外の琉球諸語の研究者たちにとってもなかなか聴くことのない機会となったのではないだろうか。

4. 学生たちがウェビナーで下地イサムさんから学んだこと

ここでは、学生からの観点を紹介したい。ウェビナーの前に設定した課題は、授業で学んだ「バイリンガル」の理論をヒントにして、イサムさんがどのような日本語と宮古語のバイリンガルであるか、ウェビナーでのイサムさんの話、イサムさんの曲と（みゃーくふつの）歌詞とメロディー、いずれかを聴いて分析するという設問だった。

学生たちは思い思いのアプローチで課題に取り組んだ。イサムさんのウェビナーの録画を

何度も見直した人、楽曲を聴いた人、中には外国語を練習するようにイサムさんの曲のみゃーくふつの発音を真似して暗記を行い、その後で日本語の意味を確認したなど、イサムさんの歌を通してみゃーくふつの語学学習をした人、真剣に取り組んだ様子が伝わるレポートが多く提出された。本を読んで書く課題とは異なり、Zoomではあってもウェビナーという形で直接、イサムさんの話を聴いたり、歌を聴いたりしたからであろうか、レポートを書く動機が高いと感じられた。それは、ウェビナー当日のコメントでも感じられたことでもある。レポートとは別に、当日提出されたコメントシートの中で一人の学生は、「自分の両親と同年代で日本にもこんなにかっこいい大人がいると知って驚いた」とイサムさんの印象を語っていた。教員が多層的に意図した「言語と社会」の内容とは別に、学生たちは自分の観点でイサムさんを捉えていたようである。

授業の課題には、イサムさんと「自分」の個人的な経験とを照らし合わせてウェビナーの話に耳を傾けていたと思われる学生のレポートも複数あった。一人の学生は、イサムさんの曲、「おぼあ」は、ほぼみゃーくふつだけで歌われているが「正確に理解はできないはずなのにも関わらず、涙が流れた」といい、自分の好きだった一人の親戚を亡くしたばかりであったので、「その表現がなんだか奥深く、はっきりと理解できないからこそその味さえ感じた」と書いた。同じ学生はイサムさんのウェビナーの中の「標準語（日本語）の方が語彙はたくさんあります。でもみゃーくふつでしか表現できないものもたくさんあるんです」という録画から文字起こしをした直接のことばを引用し、自分自身のハワイで育った時の経験や街での挨拶が“Hello”ではなく、“ALOHA”であったことを思い出し、“Hello”では伝えられない、その頃の気持ちを思い出したとも書いた。別の学生は、ウェビナーに参加する前に、イサムさんについてインターネットで調べたり、歌をYouTubeで聞いてみたところ、楽曲のみゃーくふつだけだったのでイサムさんは小さい頃からずっとみゃーくふつを話していて、上京してから初めて標準語（日本語）を習得したのだと考えたという。しかし、ウェビナーに参加して驚いたのは、イサムさんが小さい頃からみゃーくふつが話せたわけではないということだった。「なぜみゃーくふつで歌うのか」と聞かれた時の答えとして、イサムさんが答えた「みゃーくふつでしか表現できないような感情や情景がある」という発言を聞き、「ことばに文化や考え方が宿っている」というその感覚が初めて腑に落ちたという。そこでは、自分が子どもの頃にアメリカで身につけた価値観やスタイル、「日本語を話す時には人に伝えられない感情やニュアンス」があることを挙げていた。

言語は社会と関わると同時に、個人の大切なアイデンティティでもある。課題の中で、イサムさんの歌とトークを通して、学生たちは自分自身の経験やことばの持つアイデンティティを重ね、振り返っていたようである。

5. 結びとして

先述した学生たちと同様に、筆者も宮古島に足を運ぶ前には論文や資料を読み漁り、宮古

島について知っているという幻想を抱いて現地に入った。しかし、足を運ぶうちに、わかっていると思った論文や資料そのものが、実は最新の状況や実際の地域とそぐわないことがわかってきた。つまり、自分の足でゼロから調べなければ確実にわかったとは言えないことが、わかったのである。例えば、当時読んでいた論文では、60歳以上がみゃーくふつの話者であるという大まかな認識であったが、集落ごとにその濃淡は違い、また集落ごとのみゃーくふつの「方言」とも考えられるアクセントや語彙は異なるので、一様ではなかった。

みゃーくふつを「流暢に³⁾」日常生活で話している話者は、2020年現在では80歳以上の高齢者であると宮古島の久松を中心にフィールドワーク調査を行っていて実感するところであるが、久松出身のイサムさんのようにみゃーくふつでしか表現のできない歌をみゃーくふつで歌い、美和さんのように古謡を復興して謳い、民謡を唄うことで、みゃーくふつの新たな側面に光を当てている40代50代世代の話し手も宮古島にいる。つまり、まだみゃーくふつは消滅しているわけではない。特に、歌、古謡、民謡などの音楽の中には確実に残るのではないだろうか。

今回のアジア・フォーラムのウェビナーを行ったことで気づいたことはたくさんあるが、ここでは二点を挙げて結びとしたい。一つは、今回、みゃーくふつの話者、歌手のイサムさんをアジア・フォーラムにお呼びしたことで、国際基督教大学アジア文化研究所に改めて「琉球」との関わりを呼び込むことができたのかもしれないということである。日本とアジアとの接点として琉球は一つの要となる。今後も、日本の中にありながら、日本の中で最もアジアに近い琉球に光の当たる研究が研究所に蓄積できればと考える。もう一点は、ウェビナーというオンライン上の「学び」の経験である。2020年の春学期、6月はコロナウイルスのもたらした「自粛生活」という特異な状況であったため、軽快なイサムさんのトークや音楽は、自粛疲れの参加者に直接、響いたのではないだろうか。今回のウェビナーは授業履修者にとっては「授業」でありながらも、予想外に地域や職業を超えて、学外の人達と一緒に「聴く」機会となった。バーチャル空間の中で、学外の人達と「同席」し、宮古島のことばや文化に向き合う経験を、学生たちはこの経験をどのように受け取ったのだろうか。急転した学生生活の中で、心身ともに疲れていただろう学生たちが、ウェビナーの感想の中で書いたように、ことばはわからないものの、涙がでるほど心が揺さぶられたり、こんな大人もいたんだと感激したり、通常の授業では考えられないほどの感情が動いたようである。そこでは、Zoom上とはいえ、ウェビナーを通してイサムさんの生の声と歌に触れた「リアルな」学びであったように思われる。

最後に、アジア文化研究所主催のアジア・フォーラムのウェビナー実施にあたり、国際基督教大学ITセンターの中嶋晃之さん、アジア文化研究所の所長の矢内賢二先生、裏方として汗を流して下さった研究所助手の阿曾歩さん、小栗宏太さん、郷戸夏子さん、斉藤みかさん、イサムさんのマネージャーの大城貴弘さん、出演者の下地イサムさん、與那城美和さん、ひなひろしさん、「琉球からの声を聴く」を支援して下さったJICUFのPaul Hastings

さんと Fernando Rojas さん、また、参加者のみなさまに心から感謝を申し上げます。

註

- 1) 日本国際基督教大学財団は、事業の一つとして、「ICU の国際性とリベラルアーツ教育に沿った革新的なプロジェクトを支援」する目的で教員や学生の新しい取り組みに対する支援を行っている。詳しくは財団のページを参照。<https://www.jicuf.org/faculty-2/?lang=ja>
- 2) のひなひろしさんは、下地イサムさんに先んじて日本語で宮古島の豊かな自然を織り込んだフォークソングの楽曲をリリースしている。ひろしさんの歌を聴いて與那城美和さんもイサムさんも育った。筆者が共同制作したドキュメンタリー映像「みゃーくふつの未来：消えゆく声、生まれる声」のテーマソングにひろしさんの「もうひとつのうりずんの島」の曲を使わせてもらっている。ひろしさんや美和さんの歌は、藤田ラウンドの研究ウェブサイト「多文化共生を再考する」の「動画・写真」にある「歌から考える宮古島」のリンクから YouTube 上で聴くことができる。
<https://www.youtube.com/channel/UCtsbu9qQ7GUiB558D4z4Brg>
- 3) みゃーくふつを聴いて理解する人たちは、下地イサムさんや與那城美和さんたちの世代（40、50代）の中にもおり、こうしたみゃーくふつを聴いて理解できる人たちを、イサムさんが自分で習得したように、話すレベルまでに持っていくことも、今後、言語の再活性化 (language revitalisation) として取り組む、喫緊の課題の一つであると認識している。